

ビラーン通信 21号

— 医療互助保険料納入、優良コミュニティはサムラングとバリテ —

1日に1ペソ(月額30ペソ約75円)。これは現地の支援組織CMBが、当会の支援で提供している医療・保健サービスに対して、住民にも万が一に備えて負担を要請している金額です。

ビサヤ人の農場でコーンやパイナップルの収穫時に働かせてもらうと1日60ペソ、大工などの技術があって、当会支援の校舎建設作業に従事すると日当100ペソ～150ペソ。

現金収入の手だてがある住民には決して不可能でない月額30ペソですが、病気でもないのに定期的に支払う医療保険の意味を理解してもらうのは難しいと、徴収率の悪いアトゥモロックの先生のあいだからは、やや悲観的な話も聞こえてきます。

入院・治療・投薬支援は、マラリア2名、赤痢1名他、合計63名

— クリニック責任者ジョジョとコミュニティ・ヘルスワーカーの2月分報告より —

当会支援のCMB健康医療プログラム責任者である助産婦のジョジョと、

サムラングおよびバリテ・コミュニティのヘルスワーカーであるリジャ及びヒルダから2月の報告が届きました。

1年に1回程度の巡回診療時を除いて、山のコミュニティ(現在約10地域が対象)では、ヘルスワーカーが患者の訴えに応じて常備薬を処方しています。1月訪問時に日本から持参した会員ご寄附の漢方薬も、風邪、咳、下痢の患者に与えたと報告にあります。

バリテでは、35名のうち21名が、サムラングでは12名のうち半数が「咳」を訴えています。夜間冷える山のコミュニティでは、どこも咳・風邪の患者が多く、時に結核の報告もあります。

<以下は、ジョジョの2月報告からの抜粋です>

2月11日：ヘルスワーカー・リジャは、ラムイロ・コミュニティを訪ねて、67名の子どもたちを対象に、栄養失調チェックの体重測定と駆虫剤投与を実施した。

2月14日：頭痛、悪寒、高熱が1週間続いていたキアミのティリン(33歳)とアルキヨ(29歳)は、ジェネリカ外公立病院で検査を受けた結果マラリアと診断され4日間入院。

2月18日：6日間腹痛と発熱が続いていたダタルサバンのエリック(4歳)は、上記病院で診察を受け薬を処方された。

2月19日：腰の痛み、高熱、食欲不振を訴えたバリテのカーディング(42歳)は、検査の結果、尿路感染症と診断され治療を受けた。

2月23日：血便などの症状が1ヶ月続いていたダタルサバンのアレクサンダー(28歳)は、検査の結果、アメーバ赤痢と診断され治療を受けた。

2月24日：土砂崩れの直撃を受けて頭部に深い裂傷を負ったキアミのベビン(29歳)は、上記病院に搬送され手術を受けた。

なお、平成11年度に、当会の医療支援で入院できた患者総数は60名でした。

御協力ありがとうございました。(事務局)

コミュニティだより

— マリオ先生のリーダーシップでラムブソンCO-OPは順調です —

当平成11年度FIDR助成による「ラムブソン多目的住民組合育成事業」により発足したラムブソンCO-OPは、ラムアス小学校のマリオ先生を中心に、住民の協力により順調に機能しています。

バグラス(伐期8年程度の用材用樹種)とマンゴーの苗木は、32名の組合員に100本ずつ配布。切り立ったがけになっている学校の周辺敷地にも800本。それぞれ植栽済みです。

コーンと陸稲の種子、肥料も配布され、すでに一部組合員は、第1回目の収穫後10%の利子を付けて、これらの農業資材費を完済しました。

小さな組合店舗での日用品販売は、交通不便なこの地域では大好評で、開店半年間で3万ペソ余り(約8万円)の収益がありました。

組合の収入はこのほか、本事業で購入したコーンシェラー使用料(一袋7ペソのうち、5ペソが組合収入)からも入ります。

平成10年度に支援した湧き水利用の井戸には、組合資金でさらにポンプが設置されました。組合がこのまま順調に機能すれば、今後はコミュニティや組合員が資金を負担して、維持管理、新たな施設建設も可能となります。